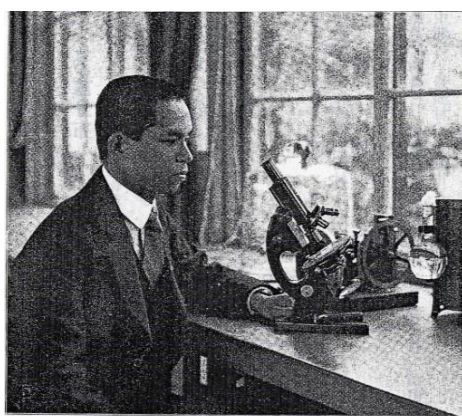


佐藤清明資料保存会会報

No.1 5



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2025.11.25

第15号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会	会長 加藤 泰久	1
2. 巻頭論考	佐藤清明と南方熊楠		
	～ 残された資料から二人の交流を探る ～		
	公益財団法人 南方熊楠記念館	三村 宜敬	2
3. 特別寄稿	真鍋島今昔物語		
	～ 佐藤清明から読み解く真鍋島の歴史・民俗・自然 ～		
	元・笠岡市地域おこし協力隊	武井 優薫	8
4. 佐藤清明資料保存会「組織と活動」の概要			20
5. 編集後記			21

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あいさつ

令和7年も、あと一月ばかりとなりました。

平成30年6月の佐藤清明資料保存会発足から、早いもので7年が経過しました。会報もこのたび15号を発行することができました。これも、ひとえに会員の皆様の佐藤清明先生に寄せる熱意とご協力の賜物と心より感謝を申し上げます。

私は平成30年1月に町長に就任して、まちづくりの基本に「郷里への愛着と理解を深める、シビックプライドのまちづくり」を掲げました。これは、里庄町の歴史や文化に光を当てるとともに、町民一人ひとりが、誇りを持てる町にしたいという思いからでした。

そのような中で、里庄町出身の博物学者佐藤清明先生の業績を掘り起こして紹介する保存会の活動は、里庄町に素晴らしい先人がいたことを町内外に広めるきっかけとなりました。

このことはまさに、シビックプライドの構想に沿ったものであり、大変、意義深いものでした。

保存会の7年間の活動を見て感じることは、佐藤清明先生がそうであるように探求心を持つこと、行動すること、様々なことを記録して残すこと、そして多岐にわたる人々との繋がりをもつことの大切さでした。

会長として会報に寄稿するのは最後になります。会員の皆様を始め、お力添えをくださった皆様に心から感謝申し上げますとともに、保存会の益々のご活躍をお祈りし、私のあいさつといたします。

本当に、ありがとうございました。

令和7年11月

佐藤清明資料保存会会長

里庄町長 加藤 泰久

巻頭論考

佐藤清明と南方熊楠

—残された資料から二人の交流を探る—

公益財団法人 南方熊楠記念館 三村 宜敬

はじめに

近年佐藤清明に関し、その交流や研究・顕彰が活発化している。その要因のひとつとして考えられるのは、NHK朝の連続テレビ小説「らんまん」（2023年放送）において、牧野富太郎がクローズアップされた。これにより、牧野と交流を持っていた各地の人物たちにさらなる光が当たることとなったのではないだろうか。そのなかの一人である南方熊楠は、植物学・説話研究・民俗学など幅広い分野において研究成果を遺し、年々新たな研究の成果が報告されている。そして佐藤清明も南方熊楠と研究交流をした人物であり、その資料の一部が田辺・白浜には遺されている。本稿では、なぜここまで熊楠の資料が残っているのかについて触れつつ、佐藤清明と南方熊楠の交流について探っていきたい。

南方熊楠の生涯

南方熊楠は、1867年に和歌山県和歌山市に生まれた。熊楠の生家は当初和歌山城の城下町で金物商をしており、南方弥兵衛と母すみの次男が熊楠である。この「熊楠」という珍しい名前については、現海南市の藤白神社のご神木である大楠より、名前に一字を貰っている。熊楠の「南紀特有の人名」においては、藤白神社（藤白王子）の大楠（楠神）について

紀伊藤白王子社畔に、楠神と号し、いと古き楠の木に、注連結びたるが立てりき。当国、ことに海草郡、なかんずく予が氏とする南方苗字の民など、子産まるるごとにこれに詣で祈り、祠官より名の一字を受く。楠、藤、熊などこれなり。（中略）なかんずく予は熊と楠の二字を楠神より授かった¹

と述べる。「熊野」と「大楠」から一字ずつ賜った熊楠が、アメリカ・イギリスからの遊学後に那智の山に籠もり、明治期に吹き荒れた神社合祀政策の嵐のなか、猛然と反対運動へ身を投じたのは、この名を授かった宿命であったのかも知れない。

近年は熊楠が合祀反対運動時に柳田国男へ宛てた書簡に「エコロジー」という用語を使ったことから、「知の巨人」の他に「エコロジーの先駆者」とも呼ばれている。熊楠はこの反対運動において、田辺で創刊された新聞『牟婁新報』へ合祀反対の投稿や、当時において先駆的な山林における下草の重

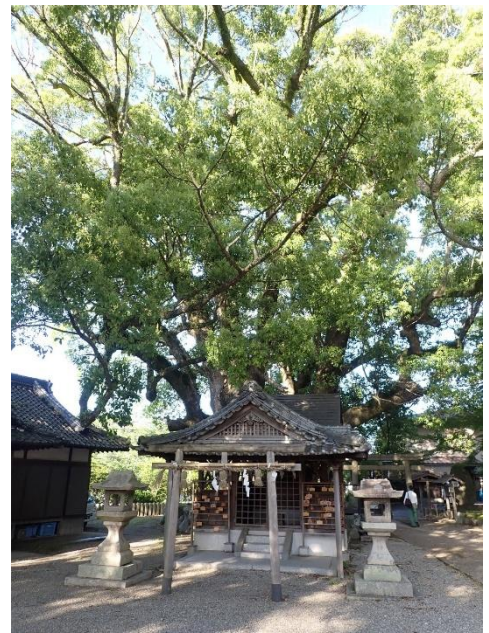


写真1：藤白神社（海南市）の大楠

要性を説いた論考などを展開している。さらに、田辺に隣接する上富田町の八上神社、田中神社などへ足を運び写真撮影をさせ、ヴィジュアル的に保護すべき森林があることを訴えている。さらには東京帝国大学教授の松村任三へ宛てた2通の書簡を柳田国男が「南方二書」として印刷し、各界の知識人へ配布している。

ただし、熊楠は飲酒による奇行も多く、合祀反対運動時には講演会に飲酒して壇上から引き摺り降ろされたり、紀伊教育会の夏期講習会に乱入したことで田辺監獄に16日間拘置されたりもしている。

このように破天荒なエピソードをもつ熊楠であるが、1929年に紀南を行幸された昭和天皇に御進講を行っている。この時熊楠は粘菌標本110点と、森永ミルクキャラメルの大箱に標本を詰め献上している。この時の様子を1949年に昭和天皇に面会した渋沢敬三は、以下のように記している。

終戦後のある日、私は陛下に拝謁を賜った際、談会々南方先生のことにも言及しましたところ、「南方は惜しいことをした。」と申され、ついでニコニコされ乍ら、「南方には面白いことがあつたよ。長門に來た折、珍しい田邊附近産の動植物の標本を献上されたがね、普通献上と云うと桐の箱か何かに入れて来るのだが、南方はキャラメルのボール箱に入れて來てね。それでいいぢやないか。」と仰せられたことがあります。平素凡そ批評がましいことを口になさるゝ陛下として、物心の本質をよく把握される片鱗を漏らされ、嬉しく存じましたが、之も南方先生なればこそ極めて自然であり、陛下も殊の外親しみ深く思召されたのでありましょう²。

と述べる。すでにこの引用内で明らかになっているが、熊楠は1941年12月29日に74歳で天寿を全うした。「知の巨人」は自身が守った神島を高台にある田辺市の高山寺から見守っている。



写真2：キャラメルの大箱

(公益財団法人 南方熊楠記念館蔵)

南方熊楠の没後の顕彰

熊楠の顕彰は没した直後より始まった。当時太平洋戦争が開戦したにもかかわらず、大阪毎日新聞には以下のようにある。

粘菌、菌類、淡水藻、地衣類に関するものは小畔四郎、上松蓊、平沼大三郎が当たり、紀行文、隨筆集、土俗学、民族学に関する論述および伝説、迷信などは地元在住の雑賀貞次郎が主に担当、南方植物研究所の維持については、田中敬忠、北島脩一郎らが数万点に及ぶ動植物、化石の標本類や数千円に達する世界各国の文献の目録作成、分類などの作業に着手³

とあり着々と作業は進められていったようだ。しかし、これらの目録作成も順風満帆ではなく、作成した目録が空襲によって消失してしまうなど、不幸なできごともある。

戦後、満州から岡田桑三が引き揚げてきたことで、熊楠の顕彰は前進する。岡田は戦前より熊楠へ興

味を示しており、いずれは熊楠について関わりたいと考えていたという。岡田は雑賀や小畔らが作成した熊楠の目録を持って、渋沢敬三のもとを訪れ熊楠の顕彰活動を依頼する。渋沢ももとより、熊楠について関心を持っていたようで、これを快諾する。これにより1947年にミナカタ・ソサエティが結成されることとなった。これには、熊楠の娘婿である岡本清造も尽力し、田辺出身の政治家片山哲や小泉信三、佐藤春夫などの協力を得ている。

ミナカタ・ソサエティが行った顕彰活動は、2点ある。ひとつは、南方熊楠の全集刊行である。そしてもうひとつは、東京・大阪などの都市部で開催された「ミナカタ・クマグス展」である。

まず全集刊行については、熊楠が生前に出版していた『南方随筆』『続南方随筆』を手掛けた岡茂雄らが活躍している。この刊行までのエピソードは岡の『本屋風情』にも当時の事情が綴られている。

そして「ミナカタ・クマグス展」においては、朝日新聞共催で東京・名古屋・大阪・神戸・和歌山市・田辺市において開催され、各地で好評を博した。特に田辺市会場では、5日間の開催で入場者26,000人を記録したという⁴。田辺市ではこれを好機と捉えて

「南方研究所（旧邸）の保存、南方先生を通じて教育振興の源泉にするといった田辺を中心とした県下的な運動を起す」ときが到来したと、南方熊楠を活用した地域の振興を唱える声が高まりつつあった⁵。

しかし、田辺市では「南方館」設立の機運は高まったが、建設場所については諸々異論が出たようである。熊楠の娘婿である岡本清造は、熊楠が「神島に見える丘」を望んでいた旨の主張をするなど、遺族側と建設委員との間に思わくの違いがはっきりと表れたようである⁶。こうしたなかに市長交代などもあり、施設建設は停滞を余儀なくされたようである。

そうした折にひとつの転機が訪れる。1967年に昭和天皇が再び白浜を行幸され、「雨にけぶる 神島をみて 紀伊の国の生みし 南方熊楠を思う」という御詠により、白浜に熊楠の顕彰施設を設立する動きがでてきた。そこで白浜町瀬戸地区の浦政吉などが働きかけ、国内外に寄付を募り1965年に財団法人南方熊楠記念館が開館した（後に公益財団法人化）。その後2006年田辺市には南方熊楠顕彰館が開館し、さらに 2025年に記念館は開館60周年を迎え両館での顕彰は続いている。

南方熊楠が遺した佐藤清明資料

熊楠の遺された資料は、一部が記念館、そして大部分が田辺市の顕彰館で整理収蔵されている。そのため熊楠が生前交流のあった人物たちへの書簡及び資料についてアクセスがしやすくなった。顕彰館に所蔵されている佐藤清明関係の資料は、刊行物・来簡6点（内2点が寄託資料）である。

熊楠と佐藤の交流は、大内氏によると1930年から始まっている⁷。二人の交流が始まる直前に佐藤が熊楠の名をあげているのは、『岡山文化資料』第2巻第1号（1929年）掲載の「岡山県俗習俗説輯報（一）」である。ここで佐藤は、「南方熊楠氏御寄稿の声に欣躍能はず取敢えず同氏歓迎の意味に於て本未定稿を草す。」と記している。その後熊楠が「馬鹿壻」（『岡山文化資料』妖怪号 第2巻第1号

(1930年)を寄稿した。そして同年から熊楠との文通が始まったようである。

そうした交流のなかで佐藤は自身が執筆した文章を熊楠へ送っている。このうち書籍(私家版含)は27点で、表1に示した表の通りである。佐藤の著作刊行年が不明なものもあり、今後修正を加えていかねばならない。

佐藤清明著作名 ()内は刊行年		顕彰館所蔵番号
吉備国川島河に於ける虬(1930)		抜刷301
南備戯食植物考(私刊)(1930)	『岡山文化資料』第3巻第1号 別刷	[和440.40]
備中塩生植物目録(私刊)(1930)	『岡山文化資料』第3巻第2号 別刷	[和440.51]
ジャンケンの種々相(1930)	『岡山文化資料』第3巻第5号 別刷	[和371.23]
岡山県貝類目録(1)(1931)		[和450.02]
岡山県植物方言辞典(1931)		[和820.05]
全国蛸斗方言集(1931)		[和820.07]
全国カマキリ方言集成[私刊](1931)		[和820.08]
馬鈴薯の方言分布(1931)		[和820.13]
全国ハコベ方言集[私刊](1931)	『植物研究雑誌』7巻 第9号別刷	[和820.10]
全国「片足飛び」方言集[予報](1931)		抜刷304
全国カヤツリグサ方言集[予報](1931)	『方言と土俗』第1巻第12号?	抜刷307
浅口郡植物誌(1932)		[和440.01]
愛知県メダカ方言語彙 愛知県メダカ方言語彙(1932年)	『土の香』第6巻第4号	抜刷297
全国蛙方言集(1932)		抜刷303
全国蟪蛄方言名彙(1932)		抜刷306
秋の虫と竈馬の方言概説(1932)		[和820.02]
岡山県蕨類目録(1933)		[和440.02]
全国蝶方言[私刊]		[和820.09]
岡山県浅口郡産蝶類目録		抜刷298
岡山県ニ於ケル「イタドリ」ノ方言分布地図		抜刷299
貝類の方言		抜刷300
女学生の歩行統計 日本婦人の内踏みに就いて		抜刷302
全国片足飛方言地図(仮想図) 全国蝶方言地図(仮想図)		抜刷305
全国ジャンケン称呼集[予報]		抜刷308
全国メダカ方言語彙		抜刷309
内地に於ける蛙の方言		抜刷310

表1 熊楠の蔵書にみる佐藤清明刊 ([] 内は南方熊楠顕彰館の蔵書番号)

参考: 佐藤清明資料保存会編 2021 『博物学者佐藤清明の世界―附録「現行全国妖怪辞典」―』

土岐隆信 2019 「佐藤清明と岡山の植物研究者」 『佐藤清明資料保存会会報』No. 3

近年の佐藤清明研究の盛り上がり

近年佐藤清明と南方熊楠との交流についての研究が注目を集めている。2021年には、顕彰館に佐藤清明宛・南方熊楠書簡が上松徹氏により寄託された。本書簡は、田村義也により「佐藤清明宛南方熊楠書簡1通 榎本宇三郎・榎本幸治父子宛南方熊楠書簡計9通⁸」として公開された。また同年には佐藤清明資料保存会から、岡山文庫から『博物学者 佐藤清明の世界 附録の「現行全国妖怪辞典」』（岡山文庫 323）（2021年）が刊行された。さらに2023年にも同氏より佐藤宛・熊楠の直筆ハガキが寄託され大内規行「佐藤清明宛南方熊楠書簡1通⁹」として明らかにされた。そして同氏により『熊楠研究』第18号（2024年）へ論考が発表されたことにより、時系列を追って佐藤と熊楠との関係を知ることができるようになった¹⁰。さらに南方熊楠研究会会員の神川隆氏が、古書店で販売されていた佐藤清明宛南方熊楠書簡（ハガキ）を入手できるというファインプレーもあった。

このように近年は新たに発見された佐藤宛南方熊楠の書簡をもとにした論考がすすめられている。これらの書簡は佐藤家より流出したものとみられている。ただし佐藤家としては、こうした書簡を古物商に売り渡したという記憶はなそうと、その経路は謎とされる。それを解明するヒントとして、顕彰館に所蔵されている中瀬喜陽資料のなかに、2010年の明治古典会七夕古書大入礼会カタログ（コピー）には、上松氏や神川氏が購入した熊楠直筆の書簡を見ることができた。そして点数は書簡2通、ハガキ8通の計10点が出品されていた。当時熊楠の直筆資料ということで、顕彰館でも注目していたようだが、既に購入された後であったようだ。そして10年以上の月日を経て、その一部の内容が明らかになったのである。

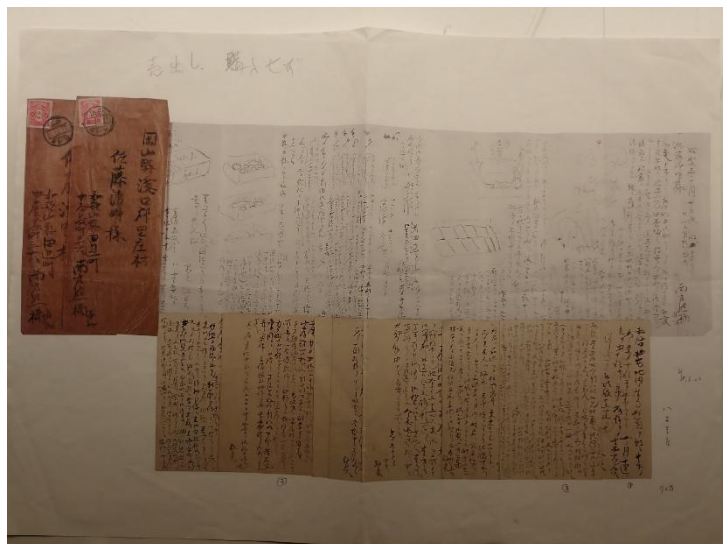


写真3：2010年の明治古典会七夕古書大入礼会カタログ
（南方熊楠顕彰館蔵 中瀬資料）

さらに佐藤清明に関しては、2025年8月に南方熊楠研究会夏期において、金文京氏（京都大学名誉教授）による共同討議「佐藤清明の近年新出資料について」が開催され、新村出と佐藤、そして熊楠らの関係が明らかにされた。このセッションでは、コメンテーターとして、大内氏と佐藤清明資料保存会顧問の木下氏がコメントをされた。これにより、熊楠研究者へ佐藤と熊楠との関係について印象づけることができたのではないだろうか。それにより今後新たな情報が得られることを期待したい。

おわりに

以上、概略的に熊楠の生涯とその後の顕彰について明示した。また顕彰館には未だに調べてきれてい

ない佐藤の資料が収蔵されており、これらの調査も今後の課題である。さらに佐藤と紀南で熊楠周辺の人物、特に植物標本を交換していると思われる榎山嘉一、2025年8月に交流が明らかにされた新村出など、佐藤が交流をしていた人物からも佐藤へのアプローチが可能になるかもしれない。何れにしても今後佐藤と熊楠との交流を起点として、研究が広がっていくことを願う。

参考文献

- ・土岐 隆信 2019 「佐藤清明と岡山の植物研究者」 『佐藤清明 資料保存会 会報』 No. 3 佐藤清明資料保存会 pp. 2-12
- ・佐藤清明資料保存会編 2021 『博物学者佐藤清明の世界―附録「現行全国妖怪辞典」―』 日本文教出版株式会社
- ・田村義也 2021 「佐藤清明宛南方熊楠書簡 1 通 榎本宇三郎・榎本幸治父子宛南方熊楠書簡計 9 通」 『熊楠ワークス』 58号
- ・大内規行 2024 「佐藤清明宛南方熊楠書簡 1 通」 『熊楠ワークス』 63号
- ・大内規行 2024 「日記・書簡にみられる南方熊楠と佐藤清明の交流 -粘菌学指導を中心に-」 『熊楠研究』 第18号
- ・Theopotamos (Kamikawa : 神川隆) 「博物学者・佐藤清明宛の南方熊楠葉書」
webサイト [notehttps://note.com/theopotamos/n/na8af2ea584fb](https://note.com/theopotamos/n/na8af2ea584fb)
同 上 2023 調査趣味誌『深夜の調べ』 第1号
-
- 1 南方熊楠 「南紀特有の人名」 『南方全集』 3 巻 1985 p. 439
- 2 渋沢敬三 「南方熊楠全集 上梓のいきさつ」 『南方熊楠全集』 第 1 巻 乾元社 p. 2
- 3 『田辺市史』 p. 810
- 4 注 3 に同じ p. 813
- 5 注 3 に同じ p. 813
- 6 注 3 に同じ p. 814
- 7 大内規行 2024 「南方熊楠と佐藤清明の交流」 『佐藤清明資料保存会会報』 No. 13 佐藤清明資料保存会 p. 5～6
- 8 田村義也 「佐藤清明宛南方熊楠書簡 1 通 榎本宇三郎・榎本幸治父子宛南方熊楠書簡計 9 通」 『熊楠ワークス』 No. 58 2021 年 10 月
- 9 大内規行 2024 「佐藤清明宛南方熊楠書簡 1 通」 『熊楠ワークス』 No. 63 2023 年 4 月
- 10 大内規行 「日記・書簡にみられる南方熊楠と佐藤清明の交流 -粘菌学指導を中心に-」 『熊楠研究』 第 18 号 (2024 年)

真鍋島今昔物語

—佐藤清明から読み解く真鍋島の歴史・民俗・自然—

元・笠岡市地域おこし協力隊 武井 優薫

はじめに

佐藤清明は戦後、笠岡諸島の真鍋島（岡山県笠岡市）において天然記念物および文化財に関する詳細な現地調査をおこなった。そこで採録されたデータを基に、筆者はあらためて真鍋島でフィールドワークを実施し、当時の事物が令和6（2024）年12月現在どのような状況に置かれているのかを確認した。本稿では筆者が実施した調査から得られた最新の知見を、佐藤による旧調査との比較を通じて報告する¹。

1 佐藤清明と天然記念物・文化財

昭和6（1931）年に清心高等女学校（現・清心女子高等学校）の生物科教諭として赴任した佐藤は、昭和23（1948）年11月、岡山県の岡山文化財専門委員ならびに国宝重要美術品史蹟名勝天然記念物調査委員会委員として県下の天然記念物および文化財に関する調査を開始した。このプロジェクトを端緒とし、佐藤は生涯にわたり各種標本の収集を通じた博物学的な調査・研究に携わることとなる。

当調査にかかる成果の一つとして、『天然記念物調査録』が編まれた。昭和23（1948）年11月から昭和29（1954）年6月までの約5年半あまり、およそ100日にわたり佐藤が岡山県各地を巡って見聞きした、天然記念物と文化財についての記録である。謄写版刷りの冊子で、全50冊、加えて補遺（別冊）2冊からなる。佐藤はさらに、昭和24（1949）年5月から昭和34（1959）年4月の間に集めたデータを土台とし、後年新たにバインダー7冊綴じで『天然記念物調査録』、ならびに『文化財調査録』を再編集した。各々のバインダー内には岡山県下の地域別に、総数58冊の謄写版刷り冊子が収納されている。

佐藤の私家版として著されたこれら一連の天然記念物・文化財調査報告書が下地となり、昭和30年代に30件もの天然記念物（旧制度下のものを加えると100件を超える）、ならびに多くの文化財が指定された。これらの資料は現在、佐藤のフィールド調査にしばしば同行していた清心高等女学校の同僚・渡邊義行より譲り受けた、岡山県浅口郡里庄町の佐藤清明資料保存会によって所有・保管されている。

¹ 本稿は、令和6（2024）年12月21日に里庄町立図書館（岡山県浅口郡里庄町）で開催された第4回清明を読む会（主催・里庄町立図書館、共催・佐藤清明資料保存会）にて、「真鍋島今昔物語—佐藤清明から読み解く真鍋島の歴史・民俗・自然—」と題して筆者が報告した内容を要約したものである。

2 佐藤清明と真鍋島

佐藤がはじめて真鍋島を訪れたのは昭和 5 (1930) 年 6 月 19 日であった。ホルトノキ、モチノキ、ヒトツバ、マルバグミ等の標本を採集した。調査のためかプライベートでか、その後数回にわたり同島を訪ねたという²。

昭和 26 (1951) 年と昭和 32 (1957) 年に各 1 回ずつ、佐藤は真鍋島での本格的な現地踏査を計 2 回実施した。昭和 23 (1948) 年 11 月にスタートした、前述の岡山県天然記念物・文化財調査プロジェクトの一環である。その記録は、『天然記念物調査録』中の第 21 冊 (小田の二)「小田の天然記念物 (ソノ二): 昭和二十六年四月調査」と、補遺「笠岡市の天然記念物 (ソノ三): 昭和三十二年三月調査」にそれぞれ収められている。各調査の概要を次に記す。

「小田の天然記念物 (ソノ二): 昭和二十六年四月調査」

- 調査時期: 昭和 26 (1951) 年 4 月 2 日~4 日
※真鍋島の調査は 3 日~4 日。2 日は同じ笠岡諸島の白石島調査。
- 主要調査対象物: 「真鍋島のホルトノキ」「妙見のウバメガシ」「大島のネズミギ (= 真鍋大島のイヌグス)」

「笠岡市の天然記念物 (ソノ三): 昭和三十二年三月調査」

- 調査時期: 昭和 32 (1957) 年 3 月 25 日
- 主要調査対象物: 「真鍋島のホルトノキ」「妙見のウバメガシ」「真鍋大島のイヌグス (= 大島のネズミギ)」「イワタイゲキ自生地」「真鍋島のオオサボテン」

上記 2 編について、里庄町立図書館の小野礼子と筆者が翻刻したテキストを、本稿末「資料一覧」に附す。

3 真鍋島の新旧比較

筆者は令和 6 (2024) 年 3 月~12 月にかけて複数回、かつて佐藤が記録した真鍋島の事物に関して、現在それらがどのような状態にあるかについての追跡調査をおこなった。「真鍋島のホルトノキ」「妙見のウバメガシ」「真鍋大島のイヌグス (= 大島のネズミギ)」「イワタイゲキ自生地」「真鍋島のオオサボテン」のそれぞれについて、佐藤の調査結果と筆者の調査結果とを照らし合わせて次に記述する。なお、「小田の天然記念物 (ソノ二): 昭和二十六年四月調査」にかかる調査を「S.26 調査」、「笠岡市の天然記念物 (ソノ三): 昭和三十二年三月調査」にかかる調査を「S.32 調査」、筆者による調査を「R.6 調査」とする。

² 佐藤清明「笠岡市の天然記念物 (ソノ三): 昭和三十二年三月調査」、『天然記念物調査録』補遺、佐藤清明、1957 年、p.4.

「真鍋島のホルトノキ」

S.26 調査

在真鍋龍太郎邸庭内。目通は 7.85 尺（約 2.38 メートル）あるいは 7.9 尺（約 2.39 メートル）、根元周囲は 8.5 尺（約 2.61 メートル）、高さは 6 間（約 10.91 メートル）。樹齢 150 年。

地上 10 尺（約 3.03 メートル）から約 5 枝に分かれ、渚枝は 10 坪（約 33.06 平方メートル）の面積を覆っている。樹齢 70 年の「白〇（判読不能）」がこれにまわりついている。

島内には本樹より分けた分株が 5 株存在する。それぞれ、圓福寺境内にある目通 4.8 尺（約 1.45 メートル）のもの、住友伊三郎邸庭内にある目通 4.2 尺（約 1.27 メートル）のもの、山下千歳邸庭内にある目通 3.5 尺（約 1.06 メートル）のもの、久一房荘邸庭内にある目通 2 尺（約 0.61 メートル）のもの、浜野〇（判読不能）三郎邸庭内にある目通 1.2 尺（約 0.36 メートル）のもの、である。

岡山県下唯一のホルトノキで、島内の子どもたちはその実を喜んで食すという。

S.32 調査

在真鍋龍太郎邸庭内。目通は 2.4 メートル、根元周囲は 2.6 メートル、高さは 10.2 メートル。樹齢 150 年。

S.26 調査では記録された樹形・樹勢、および 5 本の分株について、本調査報告書には記載がないため不明。

本樹は香川県より伝来し、岡山県下では他にホルトノキの自生物がないという。

R.6 調査

在真鍋家住宅³庭内（図 1）。寸法、ならびに樹形・樹勢は未測定。推定樹齢約 300 年⁴。

S.26 調査で記録された 5 本の分株について、未確認（所在地同定不能）の在久一房荘邸庭内株を除き、在山下千歳邸庭内株（図 2）以外の 3 株（在圓福寺境内株、在住友伊三郎邸庭内株、在浜野〇（判読不能）三郎邸庭内株）は損失。

³ 平成 18（2006）年 3 月 27 日登録の国登録有形文化財（建造物）、「真鍋家住宅主屋ほか」。明治 3（1870）年建築の主屋を中心として、明治前期建築の表門、明治 7（1874）年建築の倉庫及び納屋、明治 26（1893）年建築の乾蔵、大正 6（1917）年建築の旧郵便局舎から構成されている（笠岡市ホームページ「真鍋家住宅主屋ほか」、<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2494.html>, 笠岡市, 2017 年, 2024 年 12 月 2 日閲覧.)。真鍋島の旧家である真鍋氏代々の居処。S.26 調査および S.32 調査時の「真鍋龍太郎邸」も当家を指す。屋号は「テツヤ」、あるいは「テツチャ」。

⁴ 笠岡市ホームページ「真鍋島のホルトノキ」,

<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2484.html>, 笠岡市, 2017 年, 2024 年 12 月 2 日閲覧.

平成7（1995）年1月26日指定の市指定天然記念物、「真鍋島のホルトノキ」。真鍋家の家伝によると、もともと島内に自生していた、あるいは宝暦年間（1751～1764）に平賀源内が讃岐に苗木を持ち込みやがて真鍋家に伝えられたという⁵。

「妙見のウバメガシ」

S.26 調査

在字妙見山（真鍋島村有）。目通は9.3尺（約2.82メートル）、根元周囲は12尺（約3.64メートル）、高さは4間（約7.27メートル）。推定樹齢300年。

地上5尺（約1.52メートル）から7枝に分かれる。幹内の一部は洞穴となっているが、樹勢旺盛。

株元に力神（手力男命）を祀っている⁶。岡山県下最大の個体だという。

本樹の他に「玉姫のウバメガシ⁷」の記録もある。在字土生。目通は5.6尺（約1.7メートル）、根元周囲は8尺（約2.42メートル）。高さ、樹齢、樹形・樹勢等についての記載はない。

S.32 調査

在字妙見山（笠岡市有）。目通は2.67メートル、根元周囲は3.68メートル、高さは9メートル。樹齢300年。

樹形・樹勢の記録はない。

本樹の周辺は、一帯がマーガレット畑となっている。岡山県下最大の個体だという。

⁵ 笠岡市ホームページ「真鍋島のホルトノキ」、

<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2484.html>, 笠岡市, 2017年, 2024年12月2日閲覧。

⁶ 「小田の天然記念物（ソノ二）：昭和二十六年四月調査」には、力神のもとで身を鍛えた讃岐屋佐五郎という船員の逸話が記録されている。S.26 調査時点では、彼の曾孫が健在であったという（佐藤清明「小田の天然記念物（ソノ二）：昭和二十六年四月調査」、『天然記念物調査録』第21冊（小田の二）、佐藤清明、1951年、p.12.）。また、真鍋島出身の船大工・道西喜代吉（明治30（1897）年4月1日～昭和57（1982）年10月26日）が遺した島の歴史・文化に関する記録絵画集にも、細部が若干異なるものの、力神についての同コンセプトの語りが収録されている（真鍋島歴史文化研究会（武井優薫・関東奈保美・真鍋淳朗）『真鍋島のみた記憶 道西喜代吉氏画集展覧会 活動アーカイブ』、真鍋島歴史文化研究会、2023年、pp.52～53.）。

⁷ 本樹に隣接して玉姫神社（玉姫明神、通称「玉姫さん」）が鎮座している。旧暦の11月13日に、「玉姫さん」「上の稲荷さん」「下の稲荷さん」の各お宮で男子小・中学生のための祭り（子ども神輿、子ども接待、子ども共寝など）が催されていたが、令和6（2024）年12月現在その伝統は絶えている。

R.6 調査

在字妙見山。寸法、ならびに樹形・樹勢は未測定。樹齢不明。

株元に坐す力神の小祠は荒廃が進み、周囲は雑木林化している（図 3）。

「玉姫のウバメガシ」に関しても、付近一帯および玉姫神社の境内は雑木林化しており、長年人の手が入っていないことをうかがわせる（図 4）。

「真鍋大島のイヌグス（＝大島のネズミギ）」

S.26 調査

在真鍋大島⁸の前ノ島（真鍋島村有）。南株（下方）と北株（上方）に分かれる。南株について、目通は 10.3 尺（約 3.12 メートル）、根元周囲は 14 尺（約 4.24 メートル）。北株について、目通は 17.7 尺（約 5.36 メートル）、根元周囲は 21.5 尺（約 6.52 メートル）。高さは 10 間（約 18.18 メートル、南北どちらの株の高さかについては記載がないため不明）。南北 92 尺（約 27.88 メートル）、東西 70 尺（約 21.21 メートル）で、枝は 7 畝（約 694.22 平方メートル）を覆う。相接して生える南北株は、根元で繋がりを一株をなす可能性が大きい。その場合、推定根元周囲は 31 尺（約 9.39 メートル）。推定樹齢 400 年。

本樹の周辺ではムギ、除虫菊、エンドウ、ソラマメ等が栽培されている。全国第 2 位の個体だという。

本樹の株元にはかつて社があり、人々は山神を祀って豊作を祈願したという。本樹の俗称「ネズミギ」の由来は、かつて本島で大型のノネズミが繁殖し、それらが東隣の本島との間に筏を組み移住を企てたという逸話から⁹。

S.32 調査

在真鍋大島の前島（笠岡市有）。西株（下方）と東株（上方）に分かれる。西株について、目通は 3.5 メートル、根元周囲は 4.2 メートル、高さは 8.5 メートル。東株について、目通は 5.3 メートル、根元周囲は 6.2 メートル、高さは 15.5 メートル。南北約 21 メートル、東

⁸ 真鍋島の北方沖約 1 キロメートルに位置する無人島。大潮の満潮時には海面下に没する狭隘な砂州で繋がった前大島（前ノ島、前島、南島）と先大島（先ノ島、先島、北島）からなる。真鍋島の住民は伝統的に「オシマ」と呼称。

⁹ かつて真鍋大島に大量発生したノネズミに関しては、真鍋島の庄屋を代々務めてきた真鍋本家（天保年間（1831～1845）までは三宅姓、大正 8（1919）年に岡山県玉野市の宇野へ転居し和菓子屋を営む）に伝わる『真鍋増太郎家文書』中の逸話（宇野脩平『備中真鍋島の史料：日本漁村史料』第二巻、財団法人日本常民文化研究所、1955 年、pp.243～244.）や、漁場の奪い合いにまつわる怨念から巨大なノネズミが大量発生して農地を荒らしたといった逸話（濱本族仁『真鍋島における伝承の摘録 「歴史と民俗」：まなべ姓の淵源と真鍋氏の系譜を尋ねて』、真鍋島歴史研究会、2018 年、pp.840～841.）も確認できる。

西 27 メートル。両株ともに地上 2 メートルで 2 枝に分岐している。推定樹齢 400 年。

全国第 2 位の個体だという。

東株の東隅に山ノ神を祀っている。

R.6 調査¹⁰

在真鍋大島の前大島（個人有¹¹）（図 5）。寸法、ならびに樹形・樹勢は未測定。推定樹齢約 400 年¹²。

真鍋大島では、少なくとも 1970 年代半ばまで真鍋島住民によってサツマイモやコムギ等の自給作物、およびキクやシロガネヨシ等の商品作物の栽培がおこなわれていた。真鍋島からの通い労働（数名乗り合いの「もらい船」で渡島）が主流であったが、当時の真鍋大島には数軒の定住もみられたという（図 6）¹³。令和 6（2024）年 12 月現在、真鍋大島の土地は約 200 軒前後の地権者によって細かく分筆されている。また、平成 12（2000）年前後の時期におそらく北木島（笠岡諸島）より持ち込まれたであろうヤギが野生化、島内全域に分布し繁殖している（図 7）¹⁴。

株元に豊島石（凝灰角礫岩）製の「ラントウ」型小祠が祀られていることから、往時本樹は信仰のシンボルであったと思われる（図 8）¹⁵。また、海上のランドマークとして、漁師が漁場（網代）の位置特定に用いる、三角測量的な経験則・身体知「ヤマアテ」の目印として機能していたとも考えられる。

昭和 32（1957）年 5 月 21 日指定の県指定天然記念物、「真鍋大島のイヌグス」。かつて

¹⁰ 現地でのフィールド調査に加え、真鍋島住民からの聞き取り調査や各種文献調査も含む。

¹¹ 笠岡市ホームページ「真鍋大島のイヌグス」、
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2479.html>, 笠岡市, 2017 年, 2024 年 12 月 2 日閲覧。

¹² 笠岡市ホームページ「真鍋大島のイヌグス」、
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2479.html>, 笠岡市, 2017 年, 2024 年 12 月 2 日閲覧。

¹³ 明治 9（1876）年には定住者が 15 名いたとの記述が、『備中国小田郡真鍋島村誌』に見られる（笠岡市史編さん委員会『笠岡市史』史料編上巻, 笠岡市, 1999 年, p.475.）。

¹⁴ 野生化ヤギによるイヌグス樹皮の食害対策として、令和 6（2024）年 4 月と 12 月の 2 度にわたり、笠岡市教育委員会主導の本樹保存措置が講じられた（殺菌剤塗布と防護ネット設置）。

¹⁵ 豊漁や漂着といった海に関するエビス神信仰、豊作や雨乞いといった農に関する山の神信仰、真鍋島の伝統的な屋敷神・祖先神であるイワイガミ（位牌神）信仰、の 3 パターンが考えられる。

は本樹周辺一帯がイヌグスの原生林であったと推測される¹⁶。

「イワタイゲキ自生地」

S.26 調査

記載なし（未調査）。

S.32 調査

在岩坪集落の岬。

他の情報についての記載は特にない。

R.6 調査

在字鉾崎（図 9）。

付近には、使途不明の石造物（図 9）、かつて火葬場であった「クグリマツ」（図 10）、いくつかの石仏（図 11、図 12）、石切りのための矢穴（図 13）、丁場跡（図 14）などが見られる。

「真鍋島のオオサボテン」

S.26 調査

記載なし（未調査）。

S.32 調査

在圓福寺前の久一〇（判読不能）平邸庭内。茎の周囲は 0.6 メートル、高さは 5.2 メートル。

昭和 2（1927）年頃、沖縄方面より移植したという。

R.6 調査

圓福寺の前庭にオオサボテンの痕跡は認められない。

真鍋島在住の古老によると、かつては当地に温室があり熱帯産の植物を多種育てていたので、当オオサボテンはあるいはそのうちの一つであったかもしれないとのことである。

以上、佐藤が調査した主要 5 種（「真鍋島のホルトノキ」の分株 5 種と「玉姫のウバメガシ」を含めると 11 種）について、筆者の調査と照らし合わせながら新旧比較をおこなった。

調査対象物の所在地を示したマップを、図 15 として本稿末「図表一覧」に附す。

おわりに

本稿では、戦後佐藤が真鍋島で実施した天然記念物と文化財に関するフィールド調査を

¹⁶ 笠岡市ホームページ「真鍋大島のイヌグス」、
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2479.html>, 笠岡市, 2017 年, 2024 年
12 月 2 日閲覧。

基底とし、筆者による最新の調査から得られたデータを対応させつつ、対象物の新旧比較をおこなった。その結果、真鍋島の有する天然記念物と文化財の現在地、ならびにそれらが辿った軌跡の一端が明らかとなった。本稿での試みを以て、真鍋島における天然記念物、および文化財に関する研究・保存・利活用¹⁷の端緒となることを期待する。

また、佐藤の知的興味・関心、研究スタンスを端的にあらわす単語として、「博物学」があげられる¹⁸。事実、佐藤は柳田國男（民俗学）や南方熊楠（博物学、生物学、民俗学）牧野富太郎（植物学）らといった各界の碩学たちと幅広い交流をもっていた。専門分野に特化しタコツボ化した先鋭的アカデミズムが渦巻く現代に、佐藤が依拠した総合知としての博物学的な方法論を再評価することは蓋し意義深いことであろう。佐藤然り、埋もれた在野の俊英（フィールドワーカー、郷土史家など）が日の目を見、聞き書きや参与観察といった研究手法が再び知の盟主となることを願ってやまない。

図表一覧



¹⁷ 観光分野や地方創生分野と親和性が高いと筆者は考える。

¹⁸ 佐藤の博物学的な態度に関しては、『博物学者 佐藤清明の世界：附録「現行全国妖怪辞典」』でしばしば言及されている（佐藤清明資料保存会『博物学者 佐藤清明の世界：附録「現行全国妖怪辞典」』，日本文教出版株式会社，2021 年，pp. 44, 83, 97～98.）。



図 4 玉姫のウバメガシ



図 5 真鍋大島のイヌグス (= 大島のネズミギ)



図 6 真鍋大島の先大島に遺る定住の痕跡



図 7 真鍋大島の野生化したヤギ



図 8 豊島石（凝灰角礫岩）製の「ラントウ」型小祠



図 9 イワタイゲキと石造物



図 10 クグリマツ



図 11 石仏 A



図 12 石仏 B

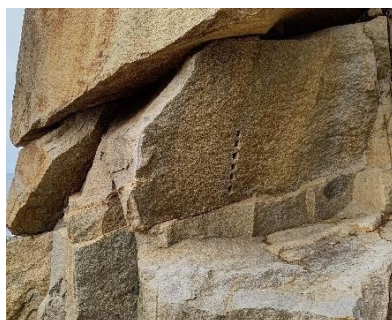


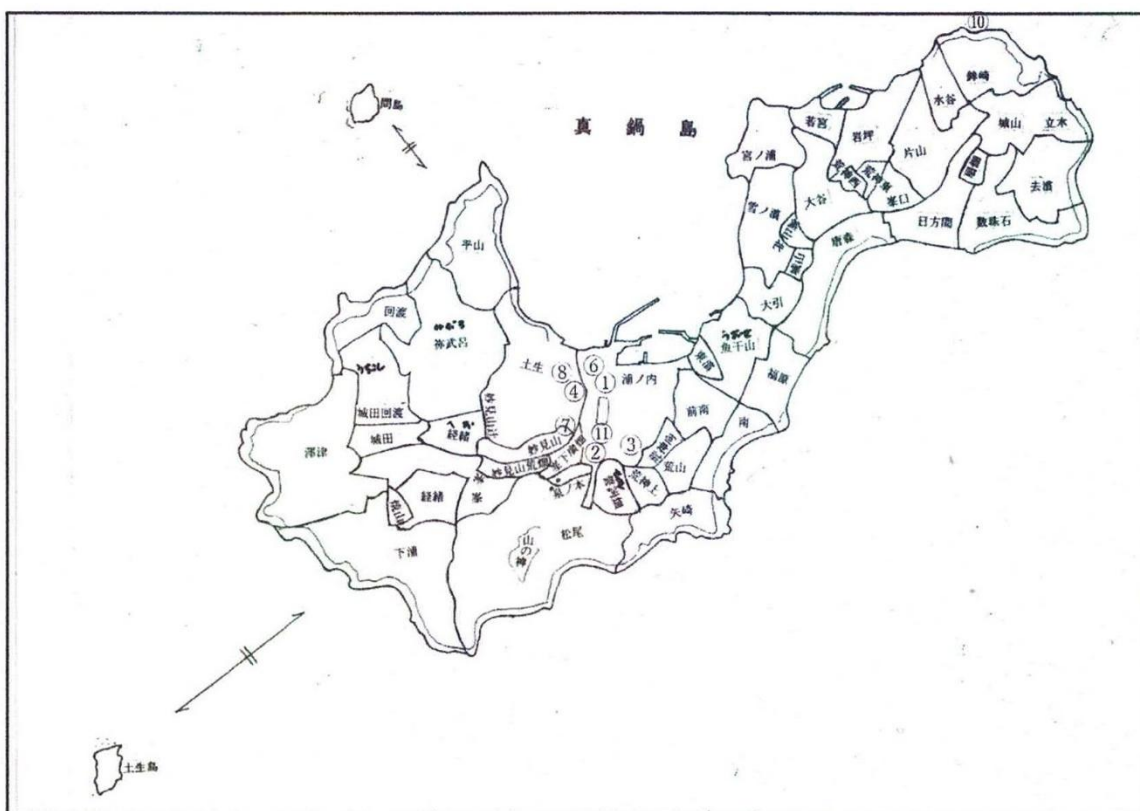
図 13 矢穴



図 14 丁場跡

①	*真鍋島のホルトノキ（原木）
②	真鍋島のホルトノキ（分株、在圓福寺境内）
③	真鍋島のホルトノキ（分株、在住友伊三郎邸庭内）
④	*真鍋島のホルトノキ（分株、在山下千歳邸庭内）
⑤	真鍋島のホルトノキ（分株、在久一房莊邸庭内、所在地同定不能）
⑥	真鍋島のホルトノキ（分株、浜野○（判読不能）三郎邸庭内）
⑦	*妙見のウバメガシ
⑧	*玉姫のウバメガシ
⑨	*真鍋大島のイヌグス（＝大島のネズミギ）
⑩	*イワタイゲキ自生地
⑪	真鍋島のオオサボテン

*は現存（令和6（2024）年12月現在）



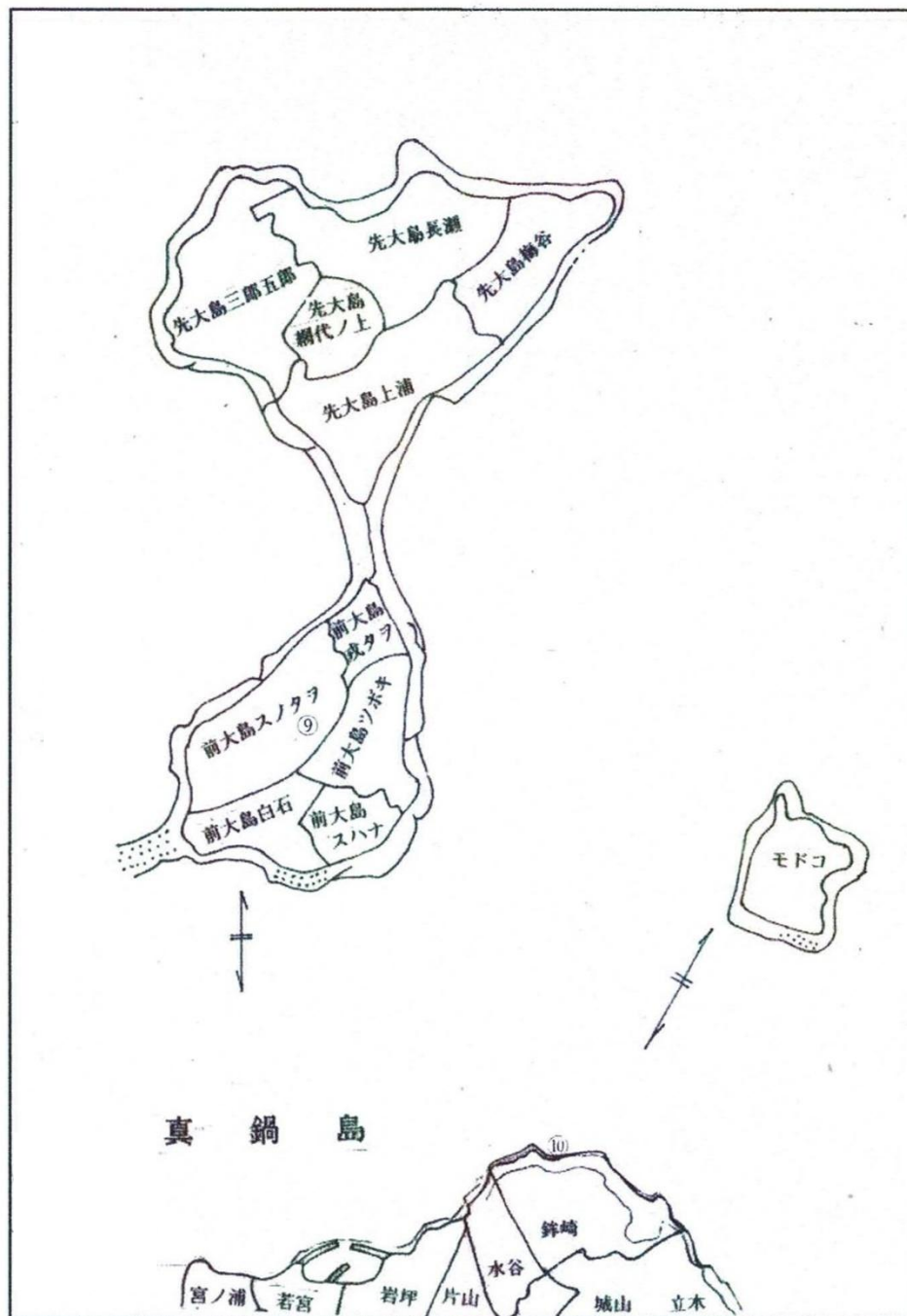


図 15 真鍋島と真鍋大島における天然記念物・文化財分布図（著者不明「昭和 63 年度真鍋島地区一筆地調査計画予定表」，発行所不明，1989 年，p.1. を基に筆者作成）

参考文献一覧

- 文献 1 宇野脩平『備中真鍋島の史料：日本漁村史料』第二巻，財団法人日本常民文化研究所，1955 年。
- 文献 2 笠岡市史編さん委員会『笠岡市史』史料編上巻，笠岡市，1999 年。
- 文献 3 佐藤清明「小田の天然記念物（ソノ二）：昭和二十六年四月調査」，『天然記念物調

査録』第21冊（小田の二），佐藤清明，1951年。

文献4 佐藤清明「笠岡市の天然記念物（ソノ三）：昭和三十二年三月調査」、『天然記念物調査録』補遺，佐藤清明，1957年。

文献5 佐藤清明資料保存会『博物学者 佐藤清明の世界：附録「現行全国妖怪辞典」』，日本文教出版株式会社，2021年。

文献6 濱本族仁『真鍋島における伝承の摘録 「歴史と民俗」：まなべ姓の淵源と真鍋氏の系譜を尋ねて』，真鍋島歴史研究会，2018年。

文献7 真鍋島歴史文化研究会（武井優薫・関東奈保美・真鍋淳朗）『真鍋島のみた記憶 道西喜代吉氏画集展覧会 活動アーカイブ』，真鍋島歴史文化研究会，2023年。

文献8 著者不明「昭和63年度真鍋島地区一筆地調査計画予定表」，発行所不明，1989年。

参照 Web ページ一覧

Web ページ 1 笠岡市ホームページ「真鍋大島のイヌグス」，
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2479.html>，笠岡市，2017年，2024年12月2日閲覧。

Web ページ 2 笠岡市ホームページ「真鍋家住宅主屋ほか」，
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2494.html>，笠岡市，2017年，2024年12月2日閲覧。

Web ページ 3 笠岡市ホームページ「真鍋島のホルトノキ」，
<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/soshiki/39/2484.html>，笠岡市，2017年，2024年12月2日閲覧。

資料一覧

【お断り】小野礼子・武井優薫翻刻による資料、『天然記念物調査録』中の第21冊（小田の二）「小田の天然記念物（ソノ二）：昭和二十六年四月調査」（佐藤清明，1951年）、ならびに補遺「笠岡市の天然記念物（ソノ三）：昭和三十二年三月調査」（佐藤清明，1957年）に関しては、都合により電子メールでの個別提供とさせていただきます。佐藤清明資料保存会事務局（里庄町立図書館）あてにお申し出ください。

佐藤清明資料保存会「組織と活動の概要」

2025. 11. 15. 現在

会の目的等（規約第1条ほか）

この会は、佐藤清明の業績を顕彰し、資料の収集、整備、保存、活用をするとともに、次代を担う青少年の健全な育成や地域文化活動、教育事業を推進することを目的とする任意団体で、会員の負担する会費等によって運営している。

佐藤清明資料保存会役員（規約第8条）

令和7年1月現在

名誉会長 生宗脩一
会長 加藤泰久
副会長 杉本秀樹、稲田多佳子、小野哲司
顧問 江田伸司、岡本泰典、木下浩、佐藤美清
理事 安倍郁雄、伊藤智行、才野基彰、佐藤泰徳、高橋達雄、徳山容、安原清隆、山本直樹、小野礼子
監事 杉井睦保・西崎康男

専門部等の活動

清明研究会（月1回程度開催）

佐藤清明の残された著作物などを整理し、著作目録を完成させることを目的に活動。貴重資料のアーカイブ化をめざす。『現行全国妖怪辞典』は、アーカイブ化完了。

清明を読む会（平成30年度から、隔月開催基本に適宜開催）

会員を含む、県内外から研究者を招き、佐藤清明の業績を紹介する公開講座。

顕彰展示「里庄のせいめいさん展」

佐藤清明に関する資料や佐藤清明資料保存会の活動による成果物を展示公開。

分科会の設置（規約第4条）

記の4分科会を設け、会員が参加している。所属外の分科会の活動にも参加できる。活動の成果は、顕彰展示（定期開催の「せいめいさん展」）を中心に、清明を読む会・会報原稿の執筆等で報告する。

※分科会参加者名簿

民俗・方言	木下 浩・才野基彰・安倍郁雄・小笠原正志・才野嘉子 藤井成加・小野礼子
動物・植物	岡本泰典・江田伸司・佐藤美清・安原清隆・徳山 容 西崎康男・中尾茂男
文化財・天然記念物	稲田多佳子・佐藤健治・佐藤泰徳・高橋達雄・岡堂孝志
教育・年譜	生宗脩一・土岐隆信・杉井睦保・伊藤智行・中川幸徳

菊桜保存育成会の活動

佐藤清明が、戦火（米軍による岡山空襲）から守り保存してきた「六高菊桜」の保存育成を目的とした「佐藤清明資料保存会」内の別組織。会員が拠出する会費をもって、「佐藤清明が講師として勤務していた岡山大学構内（大学本部前庭）に植樹し現存する菊桜の管理・保存会が里庄町歴史民俗資料館前庭に植えた菊桜の管理・母樹として今に残る佐藤清明旧宅内菊桜の保護管理・樹木医を講師とした生桜の育苗管理等にかかる研修」等を実施するほか、一般対象のリーフレット・次代を担う町内の小中学校児童生徒向けの菊桜雄本の編集と発行・小学校への出前講座等に取り組んでいる。

<編集後記>

この度は、佐藤清明のふるさと里庄にお越しくださり。南方熊楠と佐藤清明との交流について新出資料を踏まえてお話しくださった三村宜敬氏（南方熊楠記念館）に巻頭論考のご執筆を賜りました。また笠岡市地域おこし協力隊のスタッフとして真鍋島で生活し活動されていた傍ら、天然記念物の調査にも取り組まれた武井優薫氏が、「清明を読む会」において、佐藤清明が昭和20年代から取り組んだ天然記念物調査の一環として実施した小田郡真鍋島村（現笠岡市）の調査記録と対比してレポート頂いた内容をおまとめ下さいました。

なお今号は、編集担当者のスキル不足を里庄町役場企画商工課並びに里庄町立図書館職員の方々に補っていただきようやく完成したことを特記し感謝の意を表します。

（会報担当理事・佐藤 泰徳）

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No.15

発行日 令和7年11月25日

編集 佐藤清明資料保存会

発行 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館

会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 小野哲司

住所 719-0301岡山県浅口郡里庄町里見2621

電話 0865-64-6016

ホームページ：<http://www.sl-net.town.satosho.okayama.jp>

Eメール：sl-net@sl-net.town.satosho.okayama.jp